

動物の葬禮

富岡多恵子



動物の葬禮

富岡多恵子



文藝春秋

動物の葬禮

昭和五十一年二月十五日 第二刷

著者 富岡多恵子

発行者 桒原雅春

発行所 株式会社 文藝春秋
〒一〇二 東京都千代田区紀尾井町三

印刷 凸版印刷
製本 中島製本

万一落丁乱丁の場合はお取替えいたします

目次

動物の葬禮 5

はつむかし 41

ハッピー・バースデー 63

犬が見る景色 93

なつかしの死の日々 127

昨日の少女 149

時間割 173

A
·
D
坂
田
政
則

動物の葬禮

動物の葬禮

それはたいいてい土曜日であるが、一週に一度はかなり遠い知り合いの家へヨネはいく。家から、バス、地下鉄、私鉄を乗りついで一時間以上もかかるのに、ヨネがかならずいくのは、その知り合いが、大阪北部の郊外へ引越しするずっと前からのお得意さんであったからであるが、その一軒だけでは勘定高いヨネが出向くはずがなく、じつは当の知り合いよりも、その隣りに患者が何人もおり、またそこが口をきいてくれたためについたお客さんがその近所のあちこちにできたためであった。ヨネは五十五、六歳の指圧師である。

ヨネの出店のようになってしまった知り合いは、その主が銀行の支店長になったために、郊外の門構えの家へ引越してきたのであった。支店長の家のひとたちはヨネのことをおヨネさんと呼び、センセとは呼ばなかった。支店長の家の隣りのひとたちは、ヨネを林田さんと呼んだ。かれらもセンセとは呼ばなかった。他の、二、三軒いく家のひとたちはみんなヨネをセンセと呼んだ。
し

支店長の家では、おくさんだけがヨネのお客さんであったが、そのおくさんは亭主が支店長に出世して郊外の家に住むようになってからはなぜか元氣ハツラツとしてきて、じつはあまりヨネの指圧の必要がなくなっていた。しかし、昔、といっても郊外にくる前にはヨネの住むところとわりあい近かったこともあって、引越しかととりこみごとのある時にはヨネに手伝いをいつも頼んでいたし、なにやかやの相談にものってもらって便利にヨネを利用していたという思いがあるので、一週に一度やってくるヨネに迷惑だという顔はできなかった。

ただし、自分ひとりの治療代ではヨネの日当にはならぬから、おくさんは隣りの家を紹介した。隣りの家は、鉄工所に毛のはえたような工場の社長であったが、社長は二号さんどこかで暮らしていて、家の中には怒りのカタマリたるおくさんと娘とふたりの息子がいた。この工場主のおくさんは、亭主への怒りがからだのあちこちから噴出してくるからか、年中どこかしこが痛むのであった。医者にずい分奉公した揚句、西洋医学には絶望して、あらゆる民間療法をこころみていた。普通の鍼、灸はいうに及ばず、ヤキ印のような長い柄のついた妙な鉄製の鋏を火でやいて、それを患部に置いた経文入りの和紙の上からあてるといふ灸の変種のごときものもやったことがあるし、粘土かゴムかわからぬ薄桃色の大きなダンゴをくぼませた中にモグサを山のようにのせて火をつける灸の一種をもらったこともあり、汽車に乗って、美濃の大垣というところまで指圧の名人に治療を受けにいったこともあるくらいのひとである。

だからこのひとは指圧師が背中をひと撫でただけで、その上手下手がわかった。

「林田さんは上手や」と工場主のおくさんがいったことは、ヨネにとっては光榮というべきで、

おかげでその娘も息子も、まだ高校生や中学生だというのに、健康のためにヨネの指圧を受けることになったし、おくさんは知り合いにヨネを紹介したのである。

ヨネは小柄ではあるが、多少ふとり気味でがっしりしたからだつきだから、貧相な女には見えなかった。いつも、支店長宅にやってくる時は、黒いズボンをはいて黒っぽい上っぱりを着ていたが、治療をする時は真白な割烹着を着た。多分それはヨネの白衣であった。元来が働き者のためか、働きつづけねばならなかったためかわからないが、腕も指もふとく、商売に適したからだをしていた。親指の先はヘラのように固くひろがっていた。

支店長の家が引越してきて半年ぐらひは、ヨネはまず出店たるその家へ行って、おくさんの治療をし、ヨモヤマ話をしてから隣りへいくことにしていたが、次第に隣りの工場主のおくさんの家へいくのが先になり、そこで夕食をよばれることが多くなっていた。それは、工場主の家の方が指圧のお客さんが多いから実入りがよいし、なんといってもアルジのいないことは気が楽だった。それに、支店長のおくさんはあちこちからだ痛んで困っているわけではないから、指圧をあまりありがたがらないが、工場主のおくさんの方は、よくきくとか上手だといってくれるし、指圧師にしてみればここが痛い、あそこが痛い、おかげでここは痛みがとれたといってくれる方がやりがいがあった。

さらに、工場主のおくさんの方は、もともと、郊外の門構えの住宅の並ぶようなところに住むのが似つかわしくないというか、喋ることばもヨネと同類でザックパンであるから、ヨネはつき合いやすいのである。

へ支店長にならばったら、やっぱりぎょうさんきますな。歳暮の品物が玄関の脇の三疊に積んだありますよ。開けてもみんうちから、なんやまた外国のウイスキーか、なんやまたこれかいって、ボンと放ったあるんやから」とヨネは工場主のおくさんに喋るようになっていた。

へ娘はんは、もう何べんも見合いてはるんですけど、縁談がまとまらんのは、みんな女の方からことわりはるからですよ。なんでも、此間のひとは、ええ学校は出てはるけども背エが低いからいややいうてね。その前は小姑が三人もいるのいややいいはるし、その前は学校がなんでも私立やからいうてことわりはりましたんやそうで」とヨネはいったりする。

ヨネの噂話は、支店長の家からだんだん他へもひろがっていく。工場主のおくさんが紹介してやったお得意さんの話も出るようになってきた。

へあそこの年とったおくさんはお上品なええお方ですな。そやけど、いかず後家の娘さん、もう三十五ぐらいですか、あの娘さん小さい時ケガしはって左の方の足をちょっとひきずってはりましてね、やっぱり悪い方の足をかばいいはるから、いつも足をおさえてくれいいはってね。お気の毒です。足をゆっくり指圧してあげたら、あんまりええ按配で、センセ天国にいるみたいや、いうてよろこびはりましたな」とヨネは喋っている。

へ林田さん、あないにヨソのこと喋るいうことは、うちのことも、ヨソでいうてはるいうこっちゃ」と工場主のおくさんはヨネが帰ると娘に警戒心を喚起している。

この娘は、高校二年生で、根はやさしい子であるのだろうがその年頃によくある皮肉屋で、ヨネに向って、林田さんはやっぱり指圧師の学校でいろんなこと習って、免状もらうのに試験なん

か受けたの？　なんてきいたりするから、ヨネはあまり好感をもっていない。

「へ実地と学科があるんでしょ？」と娘はヨネにたずねる。

「へ学科は、わたしら無学な人間にはようわからんのでね、実地だけですわ」とヨネは困る。

「へ林田さんも娘さんいるってホント？」

「へええ、お嬢ちゃんより二ツか三ツ上の娘がひとりいましたな」

「へそのひとなにしてはるの？」

「へつとめてますよ」

「へどんな仕事？」

「へ化粧品の宣伝とセールスマン」

こういう会話を聞いていると、工場主のおくさんが娘に警戒心を呼びおこすのも無理はない。

しかもこの娘、体質が母親に似ているのか、十七や十八で、寒くなるとあちこちに神経痛が出る。

たしかに林田ヨネにはひとりの娘があったが、その娘が中学を出てから自分をずい分困らせ、

今も困らせているのは他人にはいわない。

ヨネの娘はサヨ子といったが、中学を出るとすぐ、勝手に近くの喫茶店につとめ、そのうち歌手になるのだといって歌謡学院へ通ったかと思うと、それもやめて、化粧品の宣伝ガールになって、それがいちばん長くつづいた。多分、サヨ子は、近所のひとがヨネにサヨちゃんは美人だというくらいだから、十人並みよりは美人の方で、その自尊心と自己顕示欲が、他人の前で自分の顔にものをぬりたくったり、マツ毛をつけたたり、また他人の顔をいじくりながら説明したりする

ことで満足させられるところがあったのだろう。

しかし、その仕事も二年もつづかなかった。今ではヨネの二間しかない長屋から出ていってどこに住んでいるのかわからない。時たまぶらりとヨネのところへ帰ってきたが、それはたいいなかモノをもらうためか、ていよく金をせびるためであった。

支店長のおくさんや、工場主のおくさんがくれる、余りものの日用品や、娘さんの着なくなった服や、古い洗いざらしの反物や、はては不要の座蒲団カバーまで、ヨネはサヨ子に見つからぬようにかくしているが、結局たいいとはとられてしまう。思えば、支店長の家が、あの郊外へ榮転して引越していく時手伝って、ヨネはじつにさまざまなモノをもらったのだ。いらなくなった台所のこわれかけた椅子までもらい、古い電気アンカやら、娘さんの古い靴や、網のやぶれた鳥籠までもらってきたのだ。それらもいつの間にかみんなサヨ子もっていった。いったいそんな古い、こわれかけたものをなにに使うのかわからないが、サヨ子はみんなもらった。いったいそんなへキリンがねてるのよ」とサヨ子は或る時ふともらした。

どうやら、キリンというのは、サヨ子がいっしょに住んでいるらしい男であるのは、ヨネにはわかっていた。そうか、キリンとはうまいこというたもんや、とヨネは思っている。一度、偶然、仕事にいくのに地下鉄に乗ろうとして階段を降りていく時、前方のホームにサヨ子と背の高い男の後姿を見かけたことがあった。サヨ子は男の肩ぐらいしかなかった。サヨ子も女にしたら背の高い方で、一メートル六十五センチぐらいあるが、そのサヨ子が肩までしかないのだから、六尺以上ある、とヨネが判断したのは正確だった。しかも男はたいへん痩せていた。丸坊主ではない

が、髪はきわめて短かった。

へキリンさん、どこが悪いの」とヨネはさり気なくいった。

へどこでもええやないの、そんなこと」とサヨ子はいい、親にも自分の男のことはあまり喋らない。

サヨ子は、ヨネが見る時はいつも、化粧品品の宣伝ガールをしていたためか、濃い化粧であるが上手にしているために、感じが悪いというほどでなく、着るものもその時の流行のものを安物ながらも着ている。しかし、ヨネは、自分が働いているから、いくらまだハタチそこそこで若いといっても、娘のサヨ子が働いて疲れているのは顔を見ればわかるのである。といっても、もう男のできた娘に、幼い子供に向ってするようにこまかいことを問いただすことも叱ることもできない。

へお母ちゃんが治療したら、いっぺんに治るわ」とヨネはいった。

へアホらしい。お母ちゃんの、インチキの指圧で治るような病氣ばかりとちがうで、世の中は」とサヨ子はいう。

へけったいなこときくけどな、キリンさんて、いったいなにしてはるの?」とヨネはたずねる。
へ男一匹、なにしても食うていけるわよ」とサヨ子はいった。

サヨ子は、毛ばだったきたない畳の上に、白いパンタロンをはいた両足を投げ出し、それから上半身をごろりと横たえる。長い髪を、ネッカチーフでくるんでいたが、横たわった拍子にネッカチーフがはずれて、髪が畳の上にひろがった。

へああ、しんど」とサヨ子はなげやりな声でいった。

へ西田さんのおぼちゃんとか、支店長にならったんでしょう？ お金かしてくれへんかなあ、あそこのおっちゃん」とサヨ子は寝そべったままでいう。

へなにをいうてるねんな。なんぼ支店長やいうたかて、銀行もってるのとちがうで。西田さんとかて、月給とりや」とヨネはいう。

へそうや、なんぼ支店長やいうてえらそうにしてたかて、安月給とりやんか、あそこかて。アホくさい」とサヨ子はいった。

へあんなんに比べたら、キリンは甲斐性あるからね。貸しがあるんやからね、あっちこっちに」とサヨ子は起き上って、煙草を喫った。

へお母ちゃん、灰皿！」とサヨ子はいった。

サヨ子は裾幅の広い真白なパンタロンでアグラをかいて坐り、組んだ足の中に灰皿を置く。

へ女だてらに、なんちゅう恰好しなはる」ときすがにヨネはサヨ子の姿を見て文句をいった。

へキリンなあ、だんだん痩せて細うなってきたなあ。ホンマのキリンみたいやで、このごろ」とサヨ子は口からふわりと煙を出しながら、他人事のように喋っている。

サヨ子の顔の表情には、ハタチくらいの女のががやきも幼さもまったくなくて、他人事のように、気を入れない喋り方を見ていると、年よりもはるかに老けた感じがする。

ヨネのところに、サヨ子が時折こうしてふらりとやってきて、しばらく喋ったり、うどんとかなにかちょっとしたものを食べては帰るのであるが、ヨネの気にかかる肝腎のことは喋ってくれ